

日本語の格助詞と英語の前置詞の比較ノート

小 川 明

0. このノートでは、日本語の格助詞と英語の前置詞の比較を試みてみたい。
このような試みは、杉本(2005)、山田(1981)、吉川(1995)などに見られる。

1. 日本語の格助詞は、数が少ないが、英語の前置詞はそれと比べると圧倒的に数が多い。田中(1977: 362)によれば、助詞を「格助詞」「係助詞」「副助詞」「並立助詞」「接続助詞」「終助詞」「間投助詞」の7つに分類している。そのうち前置詞にもっともよく対応しているのが、「格助詞」である。そしてそれを3種に分類している。

主格助詞・・・・判断や動作・状態などの主体を示す。

ガ

連用格助詞・・・・動作・作用の場・対象・目的・手段などを示す。

ヲ・ニ・ヘ(動詞の目的語)

デ・カラ・ヨリ・マデ

ト

連体格助詞・・・・体言性の語句を限定する。

ノ

格助詞の数はそれほど多いわけではない。

一方英語の前置詞のほうは、かなり数が多い。

about, above, across, after, against, along, among, around, at,
before, behind, below, beneath, beside, between, beyond, by, down,
during, for, from, in, inside, into, near, off, on, opposite, outside,

over, past, round, since, through, throughout, to, towards, under, underneath, until, up, upon, with, within

2. 英語の前置詞の種類のは多さは、日本語の格助詞と比べて鮮やかな対照をなす。このことから出てくることは3つ考えられる。

(i) 日本語は区別に関して英語と比べると、大雑把であること。

(ii) 他の手段を使って英語に匹敵する細かさを表現すること。

(iii) 英語とはまったく異なる区別をすること。

以下この視点から日本語と英語を比較してみたい。実は、この3つの関係すべてが日本語の格助詞と英語の前置詞の間に見られる。

3. まず最初に動詞に伴う前置詞と格助詞を比較する。小川(2000; 2001)、杉本(2005)、吉川(1995)が同じことを試みている。英語は孤立語であり、主語と目的語は語順によって示されるが、日本語は膠着語で助詞によってそれが示される。

ところが英語では、目的語を示すのに語順だけで十分であると思われるのに、二つの仕方でも目的語を示す。つまり動詞の後に直接、目的語を置く場合と、動詞と目的語の間に前置詞を介入させる場合と二通りの仕方がある。そしてその時様々な前置詞が用いられるのである。

4. どちらを選択するのは、動詞の意味が関与する。このことは小川(1999)で調べた。目的語の種類と前置詞の出没を簡単にまとめてみる。

動詞は前置詞を取らないものと、任意のものと、取らなくてはならないものと3種類ある。次のように目的語を意味により、分けて調べてみる。

(A) 動詞の行為により、目的語の状態変化が引き起こされる。

(1) a. John broke the window.

b. They killed animals for food.

(B) 動詞の行為により、目的語が新しく造りだされる。いわゆる「結果の目

的語(object of result)」である。

(2) a. They built a small house.

b. Mary dug a hole in the garden.

(C) 動詞の行為により目的語の位置変化が引き起こされる。

(3) a. He moved the chair a little.

b. She shifted her package from one arm to the other.

(D) 目的語が動詞の行為の相手を示している。

(4) a. You will agree with me on this.

b. I was speaking to him about my plan.

(E) 目的語が動詞の行為の対象・目標を示している。

(5) a. He looked at the man piercingly.

b. He went to London by plane.

目的語は(A)、(B)、(C)において動詞の行為の影響を強く受けている。状態が変化し、新しく造りだされ、位置が変化している。一方(D)、(E)では目的語自体は直接強い影響を受けているわけではなく、行為の相手や対象になっているにすぎない。前者は前置詞を取らないのに対して後者は取る。

5. たくさんの動詞を調べてみると、以下の一般化ができる。

(6) 目的語に対するインパクトの大きい動詞は一般に前置詞をとらない。

ところが上の一般化に従わない動詞がある。目的語が受けるインパクトがない、あるいは弱いにも拘わらず前置詞を取らない動詞が存在する。admire, desire, enter, greet, help, need, regret, resembleなどである。これらの動詞の目的語は動詞の相手や対象を示していて、強い影響を受けるわけではない。それにもかかわらず前置詞を取らない。ところが派生名詞が伴う前置詞を調べると、ひとつの事実が浮かび上がってくる。

目的語に対するインパクトが強くて、前置詞を取らない動詞の派生名詞は一般にofを伴う。

(7) a. transform transformation of

- | | |
|--------------|-------------------|
| b. construct | construction of |
| c. destroy | destruction of |
| d. transport | transportation of |

しかしインパクトが弱くて、前置詞を取らない動詞は of 以外の前置詞を取るのである。

- | | |
|---------------|----------------|
| (8) a. admire | admiration for |
| b. resemble | resemblance to |
| c. greet | greeting to |
| d. help | help to |
| e. regret | regret for |

他の種類の例外があるが、それは小川(1999)を参照していただきたい。本ノートで重要なことは、前置詞が基本的には、場所を示すものであることである。

多くの古くからある前置詞は原義的には場所規定をあらわし、この視覚的、即物的な段階から、その用法が拡大され、さまざまな比喩的、抽象的關係の表現へ転用されていったのである。(小西(1976))

この説明を読むと、あたかも認知言語学を前にしている感じがする。場所というのはそこへ向かったり、離れたり、入ったり、出たり、乗ったり、降りたりするもので、元來行為によってインパクトを受ける対象ではない。それゆえ前置詞が基本的に場所を示すならば、当然目的語が強くインパクトを受ける場合には使いにくくなるだろう。

動詞が前置詞を伴う場合は、自動詞と見なし、動詞+前置詞でひとつの他動詞と見なされる。いかにさまざまな前置詞が用いられるか例を少しあげてみる。

swim across, walk along, arrive at, look at, look after, war against, ask for, graduate from, major in, delve into, dispose of,

assault on, leap over, penetrate through, add to, dispense with,
collide with

6. それに対して、日本語では語順に頼らずもっぱら助詞で示す。目的語に限らず動詞に伴う助詞を調べてみると、その時の助詞は「ヲ」「ニ」「ト」の頻度が高い。

寺村(1992: 268, 281)によれば、その分布はおおよそ次のようになる。同じ「対象」でも、動作の客体になる養ウ、抱ク、育テルなどは「～ヲ」、目ざす相手になる反抗スル、カミツク、賛成スルなどは「～ニ」、相互動作の片方である喧嘩スル、競争スル、仲直リスルなどは「～ト」となる。この区別については様々なところで触れられている。伊藤(2008)、国広(1967)、森山(2008)、山田(1981)、山中(1998)などである。日本語でも動詞の持つ意味が関与していることは、英語と同じである。

7. これを土台に小泉その他(1989)、本田(1977)などを利用して動詞の数を増やしてみる。

「～ヲ」 a. 愛スル、開ケル、預ケル、与エル、集メル、案内スル、植エル、
動カス、歌ウ、選ブ、終エル、買ウ、囲ム、乾カス、切ル、殺ス、
実行スル、支配スル、吸ウ、掃除スル、抱ク、手伝ウ、投ゲル、
飲ム、開ク、勉強スル、守ル、輸入スル、汚ス

b. 歩ク、行ク、越エル、通過スル、通ル、走ル、渡ル

(いわゆる「経路」の「～ヲ」)

c. 降リル、出発スル、出ル、遠ザカル、離レル

(いわゆる「出発点」の「～ヲ」)

「～ニ」 a. 及ブ、帰国スル、刺サル、就職スル、出席スル、座ル、近ヅク、
通学スル (到達する場所)

- b. 当タル、協力スル、答エル、参加スル、従ウ
(行為の向かう対象)
- c. 一致スル、会ウ、関係スル、相談スル、並ブ、ブツカル、混ザル
(行為の向かう対象、「～ト」と交換可能)
- d. 変ワル、ナル、変化スル (結果)
- e. 期待スル、耐エル、タメラウ (「～ニ対シテ」という意味で、
やや意味は変わるが、「～ヲ」と交換可能)
- f. 劣ル、勝ツ、負ケル、勝ル (相手)
- g. 欠ケル、優レル、成功スル (どんな点で)
- h. アル、イル、発生スル (場所)
- i. 呆レル、安心スル、感心スル、傷ツク、悩ム、満足スル
(感情の原因・理由を示し「～デ」と交換可能)
- j. 濡レル、汚レル

「～ト」 握手スル、争ウ、結婚スル、交際スル、戦ウ

3つの助詞の中では、「～ヲ」を取る動詞が圧倒的に多い。特に(b)の「経路」(c)の「出発点」以外の(a)の類の動詞が一番多い。次に「～ニ」を取る動詞が多く、「到達する場所」「場所」「感情の原因・理由」などいろいろな種類のもが入っている。それに対して「～ト」は少ない。

8. 以下日本語と英語の対応を整理する。

「～ヲ」を取る動詞の中で「経路」「出発点」以外の(a)に属す動詞の多くは、対象にある変化を引き起こす。これらに対応する英語の動詞は、一般に前置詞をとらない。例えば、

上ゲル=raise 与エル=give 温メル=warm 建設スル=build 投ゲル=
throw

しかし対象に変化を起こさない動詞でも「～ヲ」をとるものがそれに劣ら

ずかなりある。その時、さまざまな前置詞が対応する。

見ル=look at 求メル=ask for 卒業スル=graduate from 目指ス=
aim at

「経路」の「～ヲ」を取る動詞は大抵前置詞を取る。対象は場所であり動詞の行為によって変化を引き起こさないからである

歩ク=walk along 行ク=go along 渡ル=cross(over) 這ウ=creep
on 飛ブ=fly(over)

「出发点」の「～ヲ」も同様に前置詞を取り、fromに多くは対応する。

降りル=descend from 出発スル=depart from 出航スル=sail
from

9. 「～ニ」をとる動詞の多くは、対象が「行為の相手」や「目指す場所」であって、対象に変化を引き起こさない。英語においても、多くは、前置詞を取るだろうと予想できる。事実そうである。toに対応することが多い。

及ブ=extend to 着ク=arrive at, in 付ク=stick to 引ッ越ス=
move to 答エル=respond to 協力スル=cooperate with 参加ス
ル=participate in

しかし前置詞を取らない例もある(吉川(1995:19)より)。つまり他動詞である。

influence, affect, challenge, confront, consult, defeat, equal, en-
counter, greet, join,

ところがその派生名詞まで視野に入れると、of以外の前置詞を取る。これは前に述べたことと一致する。

influence on, affect on, challenge to, consultation with, equality
with, encounter with, greeting to,

日本語の「～ニ」は到達する場所と行為の向かう対象全体を区別なしに表すのであるが、英語は目指す場所・対象・相手がどのようなものか、どのような仕方で見指すのか細かく区別する。例は小西(1976)などによる。

～ニ座ル sit on sit in

onはちょっと掛ける、inは深く掛ける

～ニ乗ル get on get in

onは大型の乗り物(bus, plane, ship, truck)、inはcar, taxi

～ニ着ク arrive at arrive in

atは狭いと捉えられる場所、inは広いと見なされる場所

～ニ加ワル join with join in

withは人、inは事(game)

～ニ出発スル start for ～ニ行く go to

forは目的地、toは到着地

10. 「～ト」は多くの場合、withと一致する。

握手スル=shake hands with 争ウ=quarrel with 競争スル=compete with

11. 「～ニ」の中の(c)のグループに入る、「～ト」と交換可能の動詞については、「～ニ」が一方的で、「～ト」が相互的である。たとえば「相談スル」は、「～ニ相談スル」はある人が別の人に相談にのってもらうのであり、「～ト相談スル」はお互いに話し合うのである。それゆえ次のようになる。

(9) a. ～ト話シ合ウ

b. *～ニ話シ合ウ

c. *～ト話シ掛ケル

d. ～ニ話シ掛ケル

英語でもtoが「一方的」でwithが「相互的」である。ただ「一方的」と「相互的」について、日本語と英語は必ずしも一致しない。(10 d)に関しては、吉川(1995: 4)が指摘している。

(10) a. ～ニ(ト)会ウ meet (*to) with

b. ～ニ(ト)相談スル consult (*to) with

- c. ～ニ (ト) 混ザル mix (*to) with
 d. ～ト結婚スル get married to (*with)

12. 以上、いままでのことを整理すると、日本語は、英語と比べると大雑把であり、最初に述べた格助詞と前置詞の関係の(i)の範疇に入る。日本語の格助詞「～ヲ」「～ニ」「～ト」の三つに対して多様な前置詞が対応している。このことは、英語学習上困難を引き起こすであろうと予想できる。たくさん前置詞を覚える必要がある。ただOgawa(2003)で調べたように似ている意味をもつ語は、一般に同一の前置詞を取るので、意味の観点を取り入れると、語の取る前置詞をひとつひとつ覚えていく必要はない。

13. さて「～ニ」の他の例について調べてみる。「～ニ」には行為の対象・相手ではなく一見それと逆方向の意味を持つ場合がある。つまり「ニ」については、方向性が異なることが大きい問題となる。山中(1998)や他でも方向性の問題について考察されている。

(11) a. ジョンハ兄ニ手紙ヲ出シタ。

b. ジョンハ兄ニ(カラ)手紙ヲモラッタ。

(11a)の「兄」は行為の向かう相手であり、問題はないのであるが、(11b)は「～ニ」を「～カラ」に置き換えることができることから、まったく逆の方向である。

このような対は他にもある。

(12) a. ～ニヤル / ～ニ(カラ)モラウ

b. ～ニアゲル / ～ニ(カラ)戴ク

c. ～ニ教エル / ～ニ(カラ)教ワル、習ウ

d. ～ニ言ウ、語ル、話ス / ～ニ(カラ)聴ク

e. ～ニ貸ス / ～ニ(カラ)借リル

しかしいつもできるわけではない。逆に「カラ」がいつも「ニ」になるわけではない。

- (13) a. ～ニ勝ツ / ～ニ(*カラ)負ケル
 b. ～ニ与エル / ～*(カラ)奪ウ
 c. ～ニヤル / ～*(カラ)取ル

多くの研究において、交換できる時、「～ニ」と「～カラ」をほぼ同じ意味として扱っているが、そうではないのではないか。「～カラ」は、純粹に移動表現ではないのか。移動の意味で使える時に限って、「～ニ」に代えて使用可能なのである。

14. この「～ニ」は「～カラ」と置き換えるのではなく、「～ニ(ヨリ or ヨッテ)」の「ヨリ or ヨッテ」が脱落したと考えることができる。そうすると(12)-(13)の文法性について説明ができる。(12)-(13)の例の前半の「ニ」は、向かっていく対象であり、「ニ」の基本的意味であり問題はない。たとえば(12a)の「～ニヤル」、(12c)の「～ニ教エル」、(13a)の「～ニ勝ツ」、(13b)の「～ニ与エル」。それに対して、(12a-e)の後半は「～ニヨリ or ニヨッテ」で置き換えることができる。この文法性については、筆者自身の判断では、違和感はないが、人により判断が分かれるかもしれない。

- (14) a. ～ニ(ヨリ or ヨッテ)モラウ
 b. ～ニ(ヨリ or ヨッテ)戴ク
 c. ～ニ(ヨリ or ヨッテ)教ワル、習ウ
 d. ～ニ(ヨリ or ヨッテ)聴ク
 e. ～ニ(ヨリ or ヨッテ)借リル

そのように考えると、なぜ(13)が示すように「負ケル」が「～ニ」を取り、「奪ウ」、「取ル」が「～ニ」を取らないかが説明できる。(15a)が文法的なので、「ヨリ or ヨッテ」が脱落した(13a)も文法的になるが、(15b-c)が非文法的なので、(13b-c)も非文法的になるのである。

- (15) a. ～ニ(ヨリ or ヨッテ)負ケル
 b. *～ニ(ヨリ or ヨッテ)奪ウ
 c. *～ニ(ヨリ or ヨッテ)取ル

「奪ウ」も「取ル」も受身の「奪ワレル」「取ラレル」になると、「～ニ奪ワレル」「～ニ取ラレル」が可能なのは、「～ニヨリ or ニヨッテ奪ワレル」「～ニヨリ or ニヨッテ取ラレル」が可能だからである。受身については後述する。

「～カラ」に置き換わる「～ニ」は文の述語によっているのではなく「ヨリ」に依存して生じている。もともと「依ル」という動詞は「～ニ」を取る。この場合頼る対象であり「ニ」のもとの意味「相手・対象」に適合する。だから反対方向の意味を持つのではない。一見そのように見えるだけである。

15. このように日本語では、ある種類の述語のとき、特定の要素が脱落できるのではないか。そうすると、なぜ受身の時「～ニ」が動作主を示すのか簡単に説明できる。受身の文では、動作主が「～ニ(ヨッテ)」あるいは「～ニ(ヨリ)」で示されこの環境では通例「ヨッテ」「ヨリ」が脱落できるからである。

(16) a. コノ建物ハ開拓者ニ(ヨッテ)建テラレタ。

b. アメリカ大陸ハコロンブスニ(ヨッテ)発見サレタ。

c. ソノ医者は多クノ人ニ(ヨリ)尊敬サレテイル。

そうすると、なぜ「～ニ」が感情の原因・理由を示すかも説明できる。

「～(ノ為)ニ」の「ノ為」が脱落したのである。

(17) a. 母ハ病氣(ノ為)ニ苦シンデイル。

b. 騒音(ノ為)ニ迷惑シタ。

c. ヒドイウワサ(ノ為)ニ傷ツイタ。

しかし述語が感情を示さない時は、「ノ為」は脱落できない。

(18) a. 病氣ノ為ニ欠席シタ。

b. *病氣ニ欠席シタ。

一方「～(ノセイ)デ」の「～ノセイ」は感情の原因・理由の時でもそれ以外でも脱落できる。

(19) a. 祖母ハ病氣(ノセイ)デ苦シンデイル。

b. 病気(ノセイ)テ欠席シタ。

ある種の感情のときは、「ニ(ツイテ)」のほうが自然のように思われる。
次の例では「ツイテ」が脱落したと考えられる。

(20) a. ソノ結果ニ(ツイテ)呆レル。

b. テストノ結果ニ(ツイテ)悩ム。

16. 「為」は元々「～ニ」を取り、「ツイテ」も「～ニ」を取る。このように考えると、一見これらの「～ニ」は文の述語が決めているようであるが、脱落した要素が決めているのである。そのように考えると、すべて「～ニ」は向かっていく対象を示す。文の述語と「～ニ」は意味上関係ないのである。ある種の述語を持つとき特定の要素が脱落するのである。

もし文の述語によって決められているとすると、まったく方向性の違う「～ニ」と多様な用法の意味を持つ「～ニ」をなんらかの仕方の説明する必要がある。とりあえずここでは一つの案を示した。さらに検証する必要があると思うが、ここで思い出されるのは、日本語は場面で了解できることは、表現しないという大原則を持っていることである。主語でも目的語でも場面から推測でき了解できれば、表現しない。

(21) a. 私の弟がその事故を目撃しましたよ。

b. その事故を目撃しましたよ。

c. 目撃しましたよ。

ひょっとすると、この特徴と関係するかもしれない。これは大きく英語とは異なる性質である。

(22) a. My brother witnessed the accident.

b. *My brother witnessed.

c. *Witnessed the accident.

d. *Witnessed.

17. 以下動詞の取る格助詞以外にも手を広げてみよう。「場所・位置表現」

についてはどうであろうか。「場所」で平面上の位置を表す。「位置」で三次元の中での位置を示すことにする。前置詞とそれに対応する日本語を見てみる。まず場所について調べる。atとinが使われる。

広がりを持たない点とみなせる場所 at a hotel

広がりがあると見なせる場所 in Japan

日本語ではどちらも「ニ」を用いて区別しない。大雑把のまま不都合は生じない。

次に位置。日本語では、細かく規定するために「ノ+場所の名詞+ニ」の手段を用いて、大雑把さを補う。そうしないと正確な情報を伝えられない。英語では普通一つの前置詞で対応する。

on=~/ノ上ニ over=~/ノ真上ニ above=~/ノ上方ニ under=~/ノ下ニ
beside=~/ノ横ニ in front of=~/ノ前ニ in=~/ノ中ニ
between=~/ノ間ニ beyond=~/ノ向コウ側ニ by=~/ノソバニ
near=~/ノ近クニ

日本語では「ノ+場所の名詞+ニ」の手段を用いて、大雑把さを補うが、これは。山田(1981: 59)の言い方をすると、「ほぼ同一の概念を日本語は英語よりも「分析的」に表現していると言うことができる。」これは、最初に述べた分類の(ii)のグループ、すなわち「他の手段を使って英語に匹敵する細かさを表現すること」に入る。

18. 次に時間表現を調べてみる。日本語は、常に「ニ」でよいが、英語は単位の大きさが関与する。場所と並行的である。例は小西(1976)による。

at 時刻 at five; 一日のうちのある部分 at (noon, night, dawn);
午前・午後・夕方 in the (morning, afternoon, evening); 日 on
Friday, on June 30; 月 in April; 年 in 1974

ただし午前・午後・夕方・夜は、特定の場合、onを用いる。この区別は、日本語にはない。

on the morning of Saturday, October 14, on the night of the

murder

ただし次のような前置詞に対して、日本語は「ノ+名詞+ニ」等によって細かな区別を表す。

after=~/後ニ before=~/前ニ during=~/間ニ、~/中ニ
for=~/間 from=~/カラ within=~/以内ニ since=~/カラ、
~/以来 to=~/マデ till=~/マデ by=~/マデニ

19. 以上整理すると、場所と時間に関して、日本語は、大雑把で差し支えない時は、そのままで済ませ、支障がある場合は、形式名詞を用いて、細かく表現できるようにしている。それに対して、英語は、最初から前置詞そのもので細かな区別をしている。

20. 実は、このことは、日本語の「ノ」に対応する前置詞についても言える。二つの名詞の間関係は、推測できるので日本語ではすべて区別せず「ノ」を用いて一律に名詞と名詞の間を連結する。ところが英語では前置詞によりその関係を明示的に表現する。ただ英語でも名詞句と名詞句の間に of が生じることは、頻度が高い。生成文法において NP NP の間にほぼ機械的に of を挿入する規則が提案されたことがあった。

以下日本語の「の」に相当するところに of 以外の前置詞が入る例をあげる。松岡(1996)による。元々は、『研究社新和英大辞典』の「の」項が土台になっているとのことである。

- | | |
|---------------|---|
| (23) a. 東大の教授 | a professor at Tokyo University |
| b. 師弟の関係 | the relations between teacher and pupil |
| c. 漱石の小説 | a novel by Soseki |
| d. 頭痛の薬 | a medicine for headache |
| e. 岡山の梨 | pears from Okayama |
| f. 代数の試験 | an examination in algebra |
| g. 英文の手紙 | a letter in English |

- | | |
|-----------|--------------------------------|
| h. 生物学の権威 | an authority on biology |
| i. 隅田川の橋 | a bridge over the Sumida River |
| j. 赤鼻の人 | a man with a red nose |

このことは英語学習上困難を引き起こす。日本語と英語の間で「ノ」= of がかなりの頻度で成立する。英語自身においても NP of NP の頻度は高い。それゆえ学習者は NP と NP の間に of を入れ込む傾向を強く持つことになる。一方で、英語は名詞句と名詞句の間にその関係を明示的に示す前置詞を入れることが普通に行われる。この対立に学習者は混乱することになる。こういう図式ではないか。

21. ところが、日本語は、一方で場所と時間に関して英語にない区別を持ち込む。場所と時間に関して「～ニ」と「～デ」を使いわけるのである。つまり最初に述べた (iii) の関係、英語にはないまったく異なる区別をしているのである。

以下中右(1998)を参考にして説明する。

(24) a. There was a strange map in the room.

b. There was a great clamor in the courtyard.

これを日本語で言うとそれぞれ以下ようになる。in が「～ニ」と「～デ」と二通りに訳せることに注意。私たちが同一の前置詞を英文和訳する時、無自覚に「～ニ」にしたり、「～デ」にしている。

(25) a. ソノ部屋ニ奇妙ナ地図ガアッタ。

b. ソノ中庭デ大騒動ガアッタ。

「～ニ」と「～デ」はどちらも場所を合図する働きがある。しかしこのふたつの助詞の間には、体系的な役割分担がある。「～ニ」は (25 a) のように、個体の位置を合図するのに対して、「～デ」は (25 b) のように、状況 (状態、事態、出来事、事象、現象、行為、活動など) の位置を合図する。

もうひとつ山田(1981: 62)の例をあげる。

(26) a. 東京ニ(*デ)住ンデイル。

b. 東京デ(*ニ) 暮ラシテイル。

この区分は英語ではしない。どちらも同じ前置詞で表現する。このような「～ニ」と「～デ」の使い分けは、なかなか難しく、さまざまところでその原理の解明が試みられている。例えば、定延(2004)。

また時間に関して、「～ニ」と「～デ」が、ある場合にはどちらも使われ、意味上差が生じる。杉本(2005: 124-125)によると、

(27) The library closes at eight.

は、二通りに訳せる。

(28) a. 図書館ハ8時ニ閉館トナル。

b. 図書館ハ8時デ閉館トナル。

(28a)では8時を「閉館という事態が起こる時点」として捉えているのに対して、(28b)では8時を「閉館するまでの時間の範囲・限度」として捉え、「閉館時間は8時で終わりとなる」との含みがある。どちらも英語では、atで対応し区別していない。

22. まだたくさんの比較をする必要があるが、他の機会を見つけて試みてみたい。多分日本語は大雑把で英語は細かいということになるだろう。

以上整理してみると、日本語は、英語の多数ある前置詞に対して、少数の格助詞で対応するために、大雑把に捉える場合と、必要がある場合は、「形式名詞」(「相対名詞」)などを用いて細かく捉えることが明らかになった。それに対して英語はたくさんある前置詞を用いて、最初から細かく捉え明示的に表現している。

しかしながら日本語は、場所と時の「～ニ」と「～デ」に関して英語にはない、まったく異なる独自の区別をしている。

参考文献

- 伊藤健人 (2008) 『イメージ・スキーマに基づく格パターン構文』 ひつじ書房.
- 小川 明 (1999) 「動詞に伴う前置詞 意味から見た統語現象」 稲田俊明・岩部浩三・大庭幸男・水光雅則・武本雅嗣・西村秀夫編 『言語研究の潮流 山本和之教授退官記念論文集』 83-96、開拓社.
- 小川 明 (2000) 「日本語と英語における「目的語」の表現形式の比較の試み (1)」 東京家政大学 『英語英文学研究』 6, 66-79.
- 小川 明 (2001) 「日本語と英語における「目的語」の表現形式の比較の試み (2)」 『東京家政大学研究紀要』 41(1), 157-166.
- Ogawa, Akira (2003) "A Semantic Analysis of Collocations between Words and their Prepositions," *Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masaru Kajita*, ed. by S. Chiba et al., 551-566, Kaitakusha.
- 国広哲弥 (1967) 『構造的意味論 日英両語対照研究』 三省堂.
- 小泉 保・舟城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹編 (1989) 『日本語基本動詞用法辞典』 大修館書店.
- 小西友七 (1976) 『英語の前置詞』 大修館書店.
- 定延利之 (2004) 「モノの存在場所を表す「で」？」 影山太郎・岸本秀樹編 『日本語の分析と言語類型 柴谷方良教授還暦記念論文集』 181-198、くろしお出版.
- 杉本豊久 (2005) 「日本語助詞と英語前置詞の比較」 日英言語文化研究会編 『日英語の比較 発想・背景・文化 奥津文夫教授古稀記念論集』 119-127、三修社.
- 田中章夫 (1977) 「助詞 (3)」 『岩波講座日本語 7 文法 II』 359-454、岩波書店.
- 寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集 II 言語学・日本語教育編』 くろしお出版.
- 中右 実 (1998) 「「に」と「で」からの発想 空間認識構造を探る」 中右 実・西村義樹 『構文と事象構造』 (日英語比較選書 5) 1-54、研究社.

- 本田晶治 (1977) 「日本語の助詞「を」と編入、そして使役文について」『静岡大学教養部研究報告(人文科学編)』13, 97-122.
- 松岡博信 (1996) 「前置詞「of」の論理性と連体助詞「の」の超論理性について——句構造の階層性の有無に焦点をあてて」安田女子大学『英語英米文学論集』5, 113-122.
- 森山 新 (2008) 『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』ひつじ書房.
- 山田 進 (1981) 「機能語の意味の比較」国広哲弥編『日英語比較講座 第3巻 意味と語彙』53-99、大修館書店.
- 山中桂一 (1998) 『日本語のかたち 対照言語学からのアプローチ』東京大学出版会.
- 吉川千鶴子 (1995) 『日英比較 動詞の文法 発想の違いから見た日本語と英語の構造』くろしお出版.